十四、誕生八幡神社の重箱稲荷社

　目黒駅前の目黒通りを、港区の白金方面へ向かって歩くと、すぐ左手に誕生八幡神社（上大崎二丁目十三番三十六号）があります。江戸時代の古い記録などによると、昔は広い境内をもっていましたが、街の発展に伴いたびたび道路を広げたために、現在のような狭い境内となってしまいました。

目黒通りに面した鳥居の左右に、都会では珍しく大きなイチョウが、二本植えられています。樹齢がおよそ三百年というこの「夫婦イチョウ」は、品川区の天然記念物に指定されています。この木の樹齢からも、この神社が、古い神社であることがわかります。

誕生八幡神社は、今から五百年ほど前の室町時代、文明年間（一四六九～八六）に江戸城を築いた太田道灌が、子どもが無事に誕生することを願い、福岡県の宇美八幡神社から八幡神を迎え、祀ったのが始まりと伝えられています。やがて、道灌の熱心な祈りがかない、元気な男の子が誕生し、健康に育ったことから、この神社を「誕生八幡神社」と呼ぶようになったということです。

さて、この神社の急な階段を登ると、社殿のテラスの左側に、立派な造りの小さな社殿が設けられています。これは、「重箱稲荷」と呼ばれている稲荷社で、以前はこの近くの六軒茶屋（上大崎二丁目）にありましたが、明治四十二年（一九〇九）から誕生八幡神社で、一緒に祀られるようになりました。重箱稲荷社が建てられた年代は、明らかではありませんが、江戸時代初期の記録にもその名が記されているので、古い歴史をもつ稲荷社といえます。

当時、屋敷を守る神として、また、農耕の神として人々に信仰されていた稲荷社の一つで、「重箱稲荷」という名の由来には、次のような話が伝えられています。

 昔、ある日のこと、三代将軍徳川家光が、この辺りへ‎鷹狩りに訪れ、頃よしという時、大空高く鷹が放たれました。しかし、どうしたことか、鷹は、獲物もとらずに、はるかかなたに飛び去り、姿が見えなくなってしまいました。

「どこへ行ってしまったんだろう。」

将軍も家来の武士たちも、困り果ててしまいました。鷹がいなくては、狩りはできません。この時将軍は、道ばたに小さな稲荷神社を見つけ、持ってきた弁当の入った重箱を供え、「鷹が戻ってきますように。」と一心に祈りました。すると、不思議なことに、鷹がどこからともなく戻ってきたのです。

たいそう喜んだ将軍は、「狩りを続けるぞ。」と鷹を連れて、急いで出かけました。

この不思議な力をもった重箱は、そのまま社殿に供えられ稲荷社の宝として大切に守り伝えるようになり、このことから、この稲荷社を「重箱稲荷」と呼ぶようになったそうです。

目黒のさんま祭り

※会場：誕生八幡神社

撮影日：2003年(平成15年) 9月14日

（「しながわweb写真館」より）

